

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (四十一)

第二章 民戦後世界のうねり…植民地時代の終焉とブロック化する世界 (三)

四十一 対照的なフランスと英国の植民地支配 (三―三)



それに対して英国は大英帝国の長い植民地支配を通じて極めて老獪な知恵を生み出した。英国はイスラームの教祖ムハンマドの子孫でありながらマッカ太守の座をサウド家に追われたフサインの二人の息子を委任統治領のヨルダンとイラクそれぞれの国王に据えた。民主主義が広く普及した西欧社会では君主制はアナクロニズム(時代遅れ)に映るが、中東はまだまだ部族が幅をきかせる世界であり、何と云ってもイスラームが生活の中に根を張っている。西欧流の共和制あるいは議会制民主主義は時期尚早だった。英国は冷徹に中東の現実を見ていたのである。

1921年にマッカの太守フセインの二男アブダラーを国王とするトランス・ヨルダン王国が成立、「アラビアのロレンス」で有名なT・E・ロレンスが大英帝国の代表者として国王のアドバイザー(実際は支配者英国の回し者)となった。同国は1946年にヨルダン・ハシミテ王国として独立した。英国は貴族の子弟の帝王学養成所として名高いサンドハースト王立陸軍士官学校にヨルダン皇太子を留学させ、ハシミテ王家を英国に取り込んでいる。

ヨルダンの一般国民にとってハシミテ王家は英国が送り込んできた天下りの支配者である。しかし彼らにとって国

王が預言者ムハンマドの子孫であることはかけがえのない「ありがたい」ことであつたに違いない。首都アンマンのアラブ商人たちもハシミテ家を喜んで迎え入れた。第二次世界大戦開戦の1939年に生まれたカティーブはまだ七歳で王国独立の何たるかもわからなかったが、新国王を熱狂的に迎える父親の喜ぶ様子を鮮明に記憶している。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyal@gmail.com